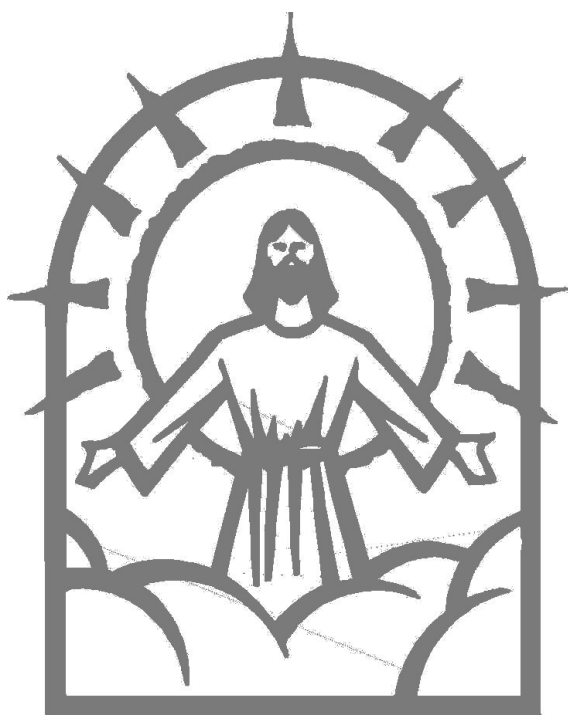


日々の聖句

11月 終末・再臨



エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。(24)

ここにはアダムから、セツ、エノシユ、ケナン、マハラルエル、エレデ、そしてエノクに至るまでの七代の記録があります。古代の人々、とくにノアの洪水以前の人々は、驚くほど長寿で、何百年と生きていますが、どんなに長生きしても最後は死を迎えています。どの人も「こうして彼は死んだ」という言葉で生涯が終わっています。アダムが罪を犯し、その結果世界に死が入り、誰ひとり、この死から逃れることができないという厳粛な事実が描かれています。

ところがエノクについてだけは、「神が彼を取られたので、彼はいなくなった」(21～24節)と書かれています。ヘブル11・5には「信仰によつて、エノクは死を見ることがないように移さ

れました。神が彼を移されたので、いなくなりました。」とあります。エノクの身に特別なことが起こったのです。人は死んで死者の世界、よみに下っていく。それは旧約に描かれた死生観ですが、エノクについては、よみに下ったのではなく、天に上げられたと言っているのです。

これは、キリスト者が、たとえからだの死を体験しても、その霊は天に上げられ、復活の日には栄光のからだを得て、主のもとに携え上げられることを予告するものでした。アダムによつて死がこの世界に入り、すべての人が死に閉じ込められました。キリストはその復活によつて信じる者を死の恐怖から解放してくださいました(ヘブル2・14～15)。

祈り 主よ。あなたの復活により、私たちを死の恐怖から解放してください、感謝します。

あなたは 私のたましいをよみに捨て置かず、
あなたにある敬虔な者に滅びをお見せにならない
いからです。(10)

ペテロはペンテコステの日に詩篇 16・8~11を
引用して、そこにキリストの復活が預言されてい
ると言いました。この詩篇を書いたダビデ自身は
死んで墓に葬られていますから、ここでダビデは
自分のことを言っているのではなく、メシアの復
活を預言しており、「彼はよみに捨て置かれず、
そのからだは朽ちて滅びることがない」というの
は、イエス・キリストの復活のことを言っている
のです。ペテロはこのことをエルサレムの真ん中
で語り、イエスの墓はすぐそこにありました。も
し、イエスが復活しなかったのなら、ユダヤの指
導者たちはイエスの遺体を持ってきてペテロを黙
らせることができたはずですが、しかし、彼らには

それができませんでした。事実イエスはよみがえ
り、そのからだとともに天に上げられたからで
す。ペテロの回りには復活の証人が数多くいたば
かりか、聖霊ご自身が力をもってそれを証して
おられました。キリストの復活は誰も否定するこ
とのできない事実なのです。

キリストの復活が成就した以上、キリストを信
じる者の復活が実現しないわけがありません。主
を信じる者は、自らの復活について、主の復活を
預言したのと同じ御言葉を用いて、「あなたは私
のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬
虔な者に滅びをお見せにならない」と確信をもっ
て言うことができます。

祈り 主よ。あなたの復活による死とよみと滅び
からの救いを、私たちに堅く確信させてくださ
い。

あなたは私を諭して導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいます。(24)

もしこの世のことが人生のすべてであるなら、この世はあまりにも不公平です。正しく、きよく生きようとする人が苦しみを受け、悪をなし、奢り高ぶる者たちがよい目を見ているのが現実だからです。そうした人が悪をなしても裁かれず、健康で、長寿を全うし、死ぬ時でさえ安らかであるという現実には、この詩を書いた人ばかりでなく、私たちも不満を感じるのは当然と言つてよいでしょう。

しかし、この世の矛盾を嘆くだけでは、天に希望を置くことができません。私たちにはこの世の矛盾を嘆きながらもどこかでこの世での成功と幸いを願ひ求める思ひがあつて、心の中ではそうしたものを追い求めていることがあるのです。だか

ら、自分以外の人がこの世の幸いを手にしているのをうらやむのです。社会の悪を批判している人自身の中に、同じ悪を生み出す罪が潜んでいることがあるのです。独裁者に抵抗し、それを滅ぼした人が次の独裁者になるといつたことが起こるのは、そのためです。

詩人は、自分自身の悶々とした思ひを主の前に持つていきました。「神の聖所に入つて」(17) というのは、実際の神殿に入るといふことではなく、「神の臨在のうちに」進み入るといふことでしょう。詩人はそこで「悪しき者」への裁きを見(17、20)、「正しい者」の救いを見ました。現実を将来から見ることによつて、はじめて、疑問と不満を解決することができるのです。

祈り 主よ。現在の問題を将来から見ることが私たちに教えてください。

人の子よ、これらの骨は生き返ることができるだろうか。(3)

「枯れた骨は生き返るか？」普通は「否」ですが、主の全能の力においては「然り」です。エゼキエルが骨に向かって預言すると、ばらばらになった人骨が骨格を形成し、筋肉が着き、皮膚で覆われ、人の姿となりました。しかし、そこにまだ命はありませんでした。さらに息に向かって預言すると、息がそのからだに入り、枯れた骨は生きてきた者となりました。

「枯れた骨」はイスラエルを指します。イスラエルは王を失い、国を失い、神殿を失い、自分たちの土地から追われ、死んで白骨と化したのです。しかし、神の言葉どおりに人々は再び国に帰り神殿を再建することができました。エゼキエルに示された幻は直接的にはイスラエルの復興を指

していますが、同時にそれは、私たちのからだの復活をも予告しています。人は死んで骨となったとしても、主はその骨から人を復活させることができます。今日の科学では遺骨から遺伝子情報を取り出し、その骨が誰のものであるかを特定することができません。まして全能の神にそれができないわけがありません。たとえ骨が焼かれて灰になり、土に返ったとしても、土の塵から人を造られた創造主にとって、そこから人を復活させることはたやすいことなのです。

骨は生き返ります。しかし問題なのは、栄光に入るためのなのか、永遠の恥辱を受けるためのなのか(ダニエル 12・2)なのです。

祈り 主よ。人は骨となり、土となって終わるのではありません。誰もが主の前に立つ時が来ることを覚えさせてください。

からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい。(28)

迫害者たちは信仰者から財産、身分、地位、自由、そして命までも奪おうとするでしょう。しかし、彼らには信仰を、神の子の身分を、天の国籍を、たましいの自由を、そして永遠の命を信仰者から奪う力はありません。

では、信仰のゆえに命を奪われた人たちは、御父の守りがなかったから、そうなったのでしょうか。その死は不幸な死だったのでしょうか。いいえ、御父は彼らに主イエスの足跡を踏ませ、御国へと導かれたのです。そのたましいは御父の御手で守られています。彼らは第一の復活に与り、第二の死はもはや何の力も持ちません(黙示録20・

4~6)。

「たましいもからだもゲヘナで滅ぼす」というのは、神が最後の日に「死とよみ」を「火の池」に投げ込まれるときに起こります。これが第二の死です(黙示録20・14)。神が「死とよみ」を滅ぼされるといふのは、永遠の命の側にいる者にとつては究極の救い、完全な勝利ですが、イエス・キリストがくださる永遠の命を拒み、霊的に死んだままである人には恐るべきことなのです。しかし、神の審判を恐れる人は、そこから逃れたいと願い、「救い主」へと導かれることでしょう。真に恐れるべきお方を恐れる。それは私たちを恐れない人生へと導くのです。祈り 主よ。ほんとうの意味であなたを恐れることを教えてください。私たちが恐れから解放し、信頼へと導いてください。

あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。(3)

「人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。」(マタイ 19・28) イエスがそう言われた時、弟子たちは、すぐにでも、新しい時代が来て、自分たちがイスラエルを治める者になるのだと考えました。弟子たちはそのような期待をもってイエスに世の終りの「しるし」を問うたのです。

それに対するイエスの答えは「そういうことは必ず起こりませんが、まだ終わりではありません」というものでした。この時の弟子たちはすぐにでもイエスが栄光の座に着き、報いを与えてくださると思っていました。しかし、イエスは弟子たち

に、「人の子」であるご自分が栄光を受ける前に、苦難を受けなければならないこと、弟子たちも同じように苦難の中で福音の宣教に務めなければならないことを教えられたのです。

確かに主は報いを携えて来られます。しかし、その日が来るまでには一定の期間があります。弟子たちには、これから後も生涯をかけて果たさなければならぬ務めがあるのです。今日の信者も、世の終わりの「しるし」にだけ心を奪われていると人に惑わされます。主が、世の終わりで、なし続けるようにと与えてくださった務めに心を向け、それにいそしむ中でこそ、私たちは主の来臨の時を迎えることができます。

祈り 主よ。あなたが来られるまで、私たちは何をなすべきなのでしょう。どのようにそれに携われたいのでしょうか。教えてください。

御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。(14)

主イエスは戦争や戦争のうわさ、また、飢饉や地震は「産みの苦しみの始まり」(マタイ 24:8)にすぎないと言われました。世の終わりの本格的な「しるし」は「迫害」(9)、「背教」(10)、「偽預言者」(11)、「不法と偽善」(12)にあると言われました。使徒パウロも「終わりの日には困難な時代が来る」と言って、信仰者が「神よりも快樂を愛する者になり、見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者」になると言っています(第二テモテ 3:1~5)。

しかし、そのよう中でも福音は全世界に宣べ伝えられ、すべての民族に証しされます。そして、それが達成された時、「世の終わり」が来るので

です。世界宣教は世の終わりの「しるし」のひとつです。今日、福音は全世界に、また、すべての民族に証しされているように見えますが、イスラム圏や共産圏では自由な伝道ができません。また、かつて「キリスト教国」と呼ばれた国々やリバイバルが起こった地域でも、人々は福音から離れ、再度の福音宣教が必要となっています。アジアの多くの国では福音が人々に浸透しているとは言えない状態です。主の来臨を待ち望む者は福音の宣教に励みます。主の来臨は福音宣教の力であり、福音宣教は主の来臨に備えるものなのです。このふたつは切っても切れない重要な結びつきを持っています。

祈り 主よ。この終わりの時代にこそ、福音の宣教に励む私たちとしてください。それによって主の日が来るのを早めることができますように。

それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの「荒らす忌まわしいもの」が聖なる所に立っているのを見たら：(15)

「荒らす忌まわしいもの」に関するダニエルの預言(ダニエル11・31、12・11)は、シリアのアンティオコス・エピファネスがエルサレムを攻め、神殿を汚し、そこに異教の祭壇を築いたことによつて成就したと言われますが、そうした過去の出来事だけでは理解しきれないものを残しています。実際、イエスは、この預言をこれから起こることとして語っておられます。

弟子たちは「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」(マルコ13・1)と言つて、神殿が立派なのに心を奪われていました。しかし、イエスはそれがごとごとく崩れ去る時が来ると言われ(マタイ24・

2)、それは紀元70年にローマ軍がエルサレムを攻め、神殿を破壊した時に成就しました。イエスは「荒らす忌まわしいもの」という言葉によつてローマ軍を指しておられたのです。

歴史は繰り返すもので、聖なるものが悪魔的なものによつて汚されることはこれからも起こるのです。かつてエルサレムに起こったことが、世界的な規模で起こり、信仰者に大きな苦難が臨むことでしょう。しかし、主は、悪がはびこる中でも、ご自分の民を守ってくださいます。苦難が予告されているからといって気落ちすることなく、その中でも世界を治め、歴史を導いておられる主を仰ぎ見て歩みたいと思います。

祈り 主よ。あなたはどんな時もこの世を治めていてくださいます。苦難の時こそ、あなたのご支配に信頼することができますように。

偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。(24)

神が預言者を遣わして神の言葉を語らせたようにサタンも偽預言者を世に送って人々を惑わします。また、神がキリストを世に送られたように、偽キリストを世に送り、しるしと不思議を行わせます。偽キリストと偽預言者は、主イエスが世に來られる前にも数多くいましたし、今にいたるまでも、幾人も現われては消えていきました。

けれども、世の終わりには偽キリストや偽預言者が次々と現われ、最終的には「反キリスト」と呼ばれる者が現れ、「選ばれた者たち」、つまり、まことの信仰者たちをも「惑わそう」とします。「反キリスト」は信仰者を苦しめるだけでなく、惑わそうとするのです。信仰者たちに、間

違った情報を与え、知らず知らずのうちに人々を真理から引き離そうとすることなのです。また、彼らは信仰の擁護者であるかのようにして信仰者に近づいてくることもあるでしょう。ヒットラーの時代、ドイツの教会の多くは彼の欺瞞を見抜けずに、「彼こそドイツ・キリスト教の擁護者である」と考えて、彼に従いました。ヒットラーも彼に從順な教会には恩典を与えたようです。「飴と鞭」は、いつの時代も独裁者が用いる常套手段です。ですから、信仰者には苦難に耐える忍耐と共に、究極の独裁者であるサタンに、また「反キリスト」に惑わされないよう、真理に対する感覚を研ぎすましていく必要があります。

祈り 主よ。偽キリストや偽預言者に惑わされることのないように、私たちの知性をも常にきよめてください

そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。(30)

キリストが力と栄光をおび、雲に乗って来られるのは喜ばしいことなのに、なぜ、「地のすべての部族は胸をたたいて悲しむ」のでしょうか。それは彼らがキリストに逆らい続けてきたからです。黙示録1・7に「見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかし、アーメン」とあるのも、同じことを言っています。黙示録6・14、17には、人々が洞穴や岩間に身を隠し、山や岩に向かって、「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる

日が来たからだ。だがそれに耐えられよう」と言うようになる」と書かれています。「地のすべての部族」とあるように「地」につく人々にとっては、主の来臨の日は「神と子羊の御怒りの、大いなる日」となるのです。

しかし、「天の民」には、この日は救いの日です。キリストは、「世の罪を取り除く神の子羊」であり、来たるべき怒りから救ってくださるお方だからです(第一テサロニケ1・10)。山も岩も神の怒りから人をかばうことはできません。それができるのは「千歳(ちとせ)の岩」である主イエス・キリストだけです。

祈り 千歳の岩よ、わが身を囲め。裂かれし脇の血潮と水に、罪も汚れも洗いきよめよ。世にある中も、世を去る時も、知らぬ陰府にも、審きの日にも、千歳の岩よ、わが身を囲め。(新聖歌 229)

洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日
 で、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁い
 だりしていました。(38)

「二〇一一年十月二一日」に世の終わりが来る
 と予告した人がいて、一時大きな話題となりまし
 たが、その予告は、過去の他の人の予告と同様、
 外れています。主イエスは「その日、その時がい
 つなのかは、だれも知りません。天の御使いたち
 も子も知りません。ただ父だけが知っておられま
 す」(36)と言つて、世の終わりの日を計算した
 り、予告したりすることを戒めています。

私たちに求められているのは、いつ来臨があつ
 てもよいように目を覚まして、備えをしているこ
 とです。ノアは洪水に備えて箱舟を築きました
 が、他の人々は「食べたり飲んだり」して日常の
 ことに没頭していました。「めとったり嫁いだ

り」という言葉は、その飲食が結婚式の祝宴の飲
 食であることを示唆しています。日常は日常で
 も、真面目な労働というよりは享樂的なことにな
 っつをぬかしていたのでしよう。

神は信仰者に地上での楽しみを許しておられま
 すが、それは神を知らない人々と同じ「度を越し
 た放蕩」(第一ペテロ4・4)であつてはならな
 いのです。人々は自分たちと同じように振る舞わ
 ない信仰者を中傷するでしようが、それは、やが
 て神の前に申し開きをしなければならぬことを
 知らないからです。信仰者たちは、この世の祝宴
 でなく、天の祝宴、「子羊の婚宴」(黙示録19・
 9)に招かれた幸いを知っていますので、その時
 を目指して、慎みをもつてこの世を歩むのです。
 祈り 主よ。私たちに「子羊の婚宴」に与る幸い
 を覚えさせ、その喜びで満たしてください。

あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。(40)

ここには、主イエスが人々を審かれる基準が語られています。主の前に二組の人々が進み出ました。一組の人々は、主が空腹であったときに食べ物を与え、渴いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねました。

なのに、この人たちは「私たちは、いつそんなことをしたでしょうか」と言っています。自分を誇るために自分がした善行を記録するようなことをしませんでした。むしろ、主への愛の足らなさや行いの不十分さに心を痛めていました。

もう一組の人々は、最初の人々とはまったく逆に、主に対して何一つしなかったばかりか、その

ことを悔いることも、そのことに心を痛めることもありませんでした。むしろ、「王であるあなたが空腹で、渴き、旅人で、裸で、病気をしたり、牢にいないはずがないではありませんか」と不服を申し立てています。この人たちに主は、「あなたの側にいた小さい者はわたしだつたのだ」と言っておられます。

主が人を量られる基準は、人がしたことの大きさによるものではありません。人の目に大きなことでも主の目に価値のないものもあり、人の目に小さなことでも主の目に価値のあるものもあります。主を愛し、人を愛して行ったことは、たとえ小さいことでも、主の目に価値のあることで、主はそれに報いてくださるのです。

祈り 主よ。自らを小さくし、小さい者たちに仕えることを学ばせてください。

まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。(43)

この言葉ほど、私たちにとって慰めに満ちた言葉はありません。罪深い一生を過ごし、その人生の最期が十字架の極刑であった犯罪人が、「パラダイス」を約束されたのですから。「パラダイス」は、もともとは、「エデンの園」のようなところを意味する言葉です。人の罪のためにエデンの園は失われましたが、終わりの日には失われたエデンの園が回復し、人は再び「いのちの木」の恵みに与ります(黙示録2・7、22・2、22・14)。それで「パラダイス」は神が人のために天に備えた場所という意味で使われるようになりました。第二コリント12・1～4によれば「パラダイス」と「第三の天」は同じ場所です。

しかし、彼には天に行くどんな資格があったの

でしょうか。何一つありませんでした。ですから、彼は主イエスに「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」としか言うことができませんでした。しかし彼はイエスが父なる神から御国を受け継ぎ、それを治める主であることを信じました。やつれ果て、力なく十字架につけられているイエスを目の前にしながら、なお、イエスを来臨の主と信じることができたのは、驚くべきことです。主は、この犯罪人の信仰を喜び、彼にパラダイスを約束されたのです。私たちの死後の行き先を決めるのは、私たちがイエスをどのようなお方と信じるかにかかっているのです。

祈り 主よ。私たちも十字架上の犯罪人のように、あなたに対して謙虚で確かな信仰を持つことができますように。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。(6)

イエスが自分たちから去って行かれることを直感した弟子たちに不安と動揺が広がりました。それでイエスは、ご自分が世を去っていくことが、弟子たちには大きな益となると告げました(ヨハネ 16・7)。イエスは天から地へと御父を現すために来てくださいました。しかし、それだけでは天から地への道はあっても、地から天への道は、まだ開かれていません。イエスは、地から天への道を開くために世を去ろうとしておられました。イエスの死の時、神殿の聖所と至聖所とを隔てていた垂れ幕が裂けたのは、罪びとが赦され、きよめられ御父に返る道が開かれたことを表しています。イエスは十字架の死によって御父への道を開

いてくださったのです。いや、ご自身が「道」そのものとなつてくださいました。私たちはイエスという「道」を通つて御父に至るのです。

イエスが世を去るのはまた、私たちが天に場所を持つためです。イエスは天で、御父の右にその座を占めておられますが、天にご自分の場所だけでなく、イエスを信じる者たちのための場所も用意してくださっているのです。ですから、信者は世を去つてどこに行くのか分からないのではなく、行く先を知っており、またそこに至る道も知つているのです。信仰者の行く先は主イエスがおられるところであり、その道は主イエスご自身です。

祈り 主よ。あなたは、どんな時も、私たちから去ることなく、御父に至る道となつてくださることを感謝します。

被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。(21)

文明の発達によって地球環境が壊されている現代、「被造物が…うめいている」(22)という言葉は、さらに現実味を増しています。けれども、ここでの「被造物のうめき」は環境破壊以上のことを意味しています。人類の罪は環境破壊の以前に、すでに自然界の秩序を乱していました。地上から楽園は失われ、人は自然災害に苦しみ、野の獣と戦い、さまざまな生物がもたらす伝染病に冒されてきました。大地が盤石のものではなく、揺れ動き、星もまた寿命が尽きて消えていくことは古代の人にも知られていました。じつに、人が罪の奴隷となったように、被造物全体が滅びの束縛の中に陥ったのです。

イエス・キリストの贖いは、なによりもまず、

人を罪と死と滅びから解放するものですが、キリストの贖いは人の霊にとどまらず、からだにも、また被造物全体にも及ぶのです。信仰者たちは、すでに聖霊によって神の子どもとされているのですが、主の来臨の時、からだの贖いを受け、神の御子キリストと同じ姿に変えられます(第一ヨハネ3・1、2)。御子が復活して栄光のからだをお持ちになったように、信仰者も「神の子ども」としての栄光に入ります。そのようにして創造の冠として造られた人類の回復がなされる時、全被造物もまた新しくされるのです。キリストの贖いの偉大さ、神の遠大な救いの計画のゆえに、御名をほめたたえずにはおれません。

祈り 主よ。あなたのみこころは大きく、深いのです。あなたのみこころに委ねて安んじていることができるようにしてください。

もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。(19)

ある人々は、死後の審判、キリストの再臨、からだのよみがえりなどの聖書の「教義」は、信仰者を慰め、日々を正しく生きるように動機づけるために「創作」されたもので、その教義自体が正しいかどうかはどうでもよいのだと考えます。そういう人たちは聖書のあらゆる教えを、苦しみの多い人生の中で慰めと励まし、また人生の意義や目的を見出すための「方便」であると考えます。それで聖書のどこを読み、どんなことを学んでも、それが本当のことなのか、私たちの人生と生活にどう関係しているのかなどを考えることをしないで、すぐに、「毎日を元気に過ごしないう」などという結論で終わってしまうのです。

しかし、パウロは、復活がなければ、どんなに堅くその希望を抱いていても、先に世を去った信仰者は実際は滅びてしまったのであり、私たちの信仰も、希望も、また日々の正しい生活すらも意味がなくなると言っています。私たちが聖書に向かうのは、単に自分を元気づけるためではなく、神が歴史の中で実際に成し遂げてくださった救いのみわざと、ご自分の真実にかけて明らかにしてください。くださった真理を学び、その上に信仰を築きあげ、それによって日々を生きるためなのです。真理と事実があつてこそ、日々の労苦が無駄に終わらないことを知って、「堅く立つて、動かされることなく、いつも主のわざに励む」(第一コリント 15・58) ことができるのです。

祈り 主よ。私たちの信仰と生活が聖書の真理の上に築かれたものとなりますように。

しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。(20)

使徒パウロは福音を要約して「キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれ：三日目によみがえられた」(3～5節)と言いました。キリストの十字架の死と復活にこそ私たちの救いがあるのです。

第一コリントでは、さらに、キリストの復活が、主の来臨の時、キリストにある者たちが復活することの保証であると言っています。「眠った者」というのは、キリストにあつて死を迎えた人々についての美しい描写です。彼らは死んだのではない、地上の労苦を解かれて安息の中にあるのだ。やがての日に、その霊は復活のからだを得て目覚めるといふことが、そこに意味されていきます。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げ

ましよう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」とある通りです。

キリストの復活はキリストだけでなく、キリストにつながるすべての者に及びます。「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた」(ローマ4・25)ことを信じ、「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じる」(同10・9)者は救われ、終わりの日の復活をも確信することができます。

祈り 主よ。あなたの復活がキリストにある者の復活を保証していることを感謝します。

だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(9)

イエス・キリストが来臨を約束なさってから二千年が経ちました。しかし、まだ主は再臨されません。それで、信仰に反対する人たちは、再臨を待ち望む信仰をなじってきました。また、信仰者の中にも、「聖霊の降臨や教会の誕生の中に、再臨が起こったのだ」と言って、キリストの来臨を間違って解釈する人もありました。使徒たちが再臨を宣べ伝えたのは、聖霊降臨の後、教会が誕生してからでしたから、聖霊降臨や教会の誕生がキリストの再臨であるはずがないのです。教会は初代から今にいたるまで、再臨の希望によって生かされてきました。

しかし、再臨を信じる者も、なぜ主はすぐにも再臨されないのだろうかという疑問を持ちまし

た。ペテロの時代の信仰者でさえそうなら、今日の私たちが同じ思いになっても当然でしょう。それに対してペテロは、「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようだ」と言っていて、神が日を数える数え方と人が数える数え方には違いがある。人間の尺度で神の時を測ってはならないと答えています。また、来臨の日が遅くなっているのは、ひとりでも多くの人が悔い改めて救われ、来臨の時に裁かれることがないためであるとも言っています。二千年という長い年月は、主の忍耐を言い表しています。主は私たちに忍耐を求められますが、その主ご自身が私たちを忍耐してくださっているのです。そのことを覚えながら主の来臨を待ちましょう。

祈り 主よ。あなたの忍耐を覚えながら、来臨の時を忍耐深く待つ私たちとしてください。

あなたは初めの愛から離れてしまった。だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。(4、5)

主イエスは黙示録6章以降で、世の終わりに関する神の計画を明らかにしますが、その前にアジアの七つの教会ひとつひとつにメッセージを送りました。主が教会に焦点をあてておられるのは、世の終わりにあつて、教会の役割がいよいよ重要になってくるからです。

教会の重要な役割のひとつは福音の真理を守ることです。エペソの教会はそのことにおいて怠ることがなく、「真理の柱と土台」(第一テモテ3・15)となりました。彼らはそのことで妥協しませんでした。主はエペソの信仰者の「忍耐」をほめていますが(2、3)、同時に彼らが悪者たちを「我慢しなかった」(2)こともほめていま

す。本物の忍耐や寛容とは、善悪・真偽を問わずに何事でも受け入れることではありません。「悪者」、「偽り者」に立ち向かい、真理を明らかにすることです。真理を「愛する」者はそれをないがしろにするものを「憎む」(6)のです。

しかし、エペソの信仰者たちの断固とした態度が、時として、主との愛の関係や、主にある者たちの相互の愛の関係を損なうことがあつたようです。主はエペソの信仰者に「愛」によつて「真理」を薄めてよいと言つておられるではありません。真理を守る信仰と共に、初めに持っていた「愛」をも失つてはいけないと言つておられるのです。世の終わりに、教会が守るべきものは、真理とともに「初めの愛」だからです。

祈り 主よ。私たちを「愛をもつて真理を語る」(エペソ4・15)者としてください。

あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。(10)

世の終わりに臨む教会は苦しみにあいます。しかし、主は、「あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない」と励ましてくださいます。信仰者が苦しみを受けるのは、主の守りがないからではありません。主は、信仰者を完全に守ってくださいます。しかし、それは、世の苦しみから隔離するという意味ではありません。信仰者が苦しみを味わうのは、それによつて他の人々の苦しみを知って人々を助けることができるため、また、主の苦しみに与つて主に近づくため

である場合もあります。また、曲がった世(使徒2・40、ピリピ2・15)をまつすぐに生きようとするれば、どこかでぶつかかることは避けられませんから、信仰者が受ける苦しみは、主への忠実さのしるしでもあるのです。

主は信仰者に、そうした苦難の中で「忠実であれ」と命じられますが、主もまた信仰者に対して忠実であつて、苦難を制限し、信仰者が苦難によつて倒れてしまわないよう守ってくださいます。「あなたがたは十日の間、苦難にあう」という言葉は、主が苦しみの期間を制限しておられることを教えています。

祈り 主よ。苦しみの中で私たちを守ってください。苦しみを感謝します。苦しみは永遠ではない、主の救いは近い。そのことをいつでも心に留めていられることができますように。

同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを頑なに守っている者たちがいる。(15)

どの教会にも、誉められることと、責められることの両方があるものです。ペルガモンの教会の場合、殉教者アンティパスのように「死に至るまで忠実」な信仰者がいましたが、同時に「ニコライ派」から離れようとしなかった人々もありました。

「ニコライ派」はニコライという人物が広めた教えで「バラムの教え」(14)と呼ばれているように、世と妥協することを教えました。信仰者といえどもこの世にある間は、それぞれの地域で行われている慣習に従って生きればよいのだと言って、異教の神殿に出入りをし、そこで偶像に捧げられたものを食べ、淫らなことをしたりすることを許していたのです。それは、「偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、

血とを避けるように」(使徒15・20)という決議に違反することであり、世にあつても「世の汚れに染まらず」(ヤコブ1・27)生きるようにとの教えに反することです。世との妥協は主が最も嫌われることで、主は「あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる」(黙示録2・6)と言っておられます。

世の終わりには、世の中が堕落していきますが、それは世の中の腐敗を食い止めていた教会が真理の光を隠し、腐敗を防ぐ塩の効き目を失くしつつあるからです。社会の堕落は教会の堕落から始まっています。世の堕落を嘆く前に、教会はみずからの聖さを取り戻す責任があるのです。

祈り 主よ。あなたは信仰者に聖さを求められます。あなたの聖さを世に示すことができるよう、私たちをきよめてください。

ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと保ちなさい。(25)

列王記に登場する「イゼベル」は、シドンの王女でイスラエルの王アハブの妻となりました。彼女は自分の民族の宗教、「バアル」崇拜をイスラエルに持ち込み、みずから「バアル」の預言者を養っていました。彼女は夫アハブが亡くなった後も、自分の子、ヨラムの王母として「バアル」崇拜を盛んにし、預言者エリヤやエリシャに対抗しました。テアテイラの自称「女預言者」が「イゼベル」という名前を持っていたのか、イゼベルのように異なった神々を教会に持ち込んだのでそう呼ばれたのかは定かではありませんが、彼女もまた「ニコライ派」と同じように信仰者に「淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせて」いました。

主は、彼女を病の床に、彼女の教えに従っている者たちを患難の中に投げ込み、彼女の子どもたちを死病で殺すと言われました。偽預言者に対しては、主ご自身が立ち上がって審きを行われるのです。「さばきが神の家から始まる」(第一ペテロ4・17)とは、このようなことをも指しているのでしょうか。主の審きに対して、私たちは何もすることができません。私たちは、ただへりくだって、主から受けた信仰を終わりまで守り続ける他はないのです。主イエスを信じて罪赦された喜び、御言葉を信じて試練を乗り越えることができ、感謝、主の臨在のもとで満たされた平安など、主が与えてくださった恵みから離れず、そこに留まり続けましょう。

祈り 主よ。時代に流されることなく、与えられた良きものを守り続ける私たちとしてください。

しかし、サルデイスには、わずかだが、その衣を汚さなかつた者たちがいる。(5)

黙示録2く3章の七つの教会へのメッセージはそれぞれの教会の「健康診断書」のようなものです。教会の健康な面と不健康な面とが浮き彫りにされ、「悔い改めなさい」「恐れてはならない」「良いものを守りなさい」などといった「処方箋」が書かれています。ところが、サルデイスの教会は「あなたは、…死んでいる」と言われています。「死んでいる」というのは、「死亡通知」であつて、もはや「健康診断」ではありません。

人間の医者「死亡」を確認したら、あとは何もできません。しかし、主は、ご自身が死からよみがえり、死者をよみがえらせたとお方です。「死亡通知」の後でも、教会に働きかけ、それを生き返らせることができますのです。教会の歴史には、

死んだようになっていた教会が目覚め、息を吹きかえたことが何度もありました。それは「リバイバル」と呼ばれ、私たちは今一度リバイバルが起こることを願ひ求め、期待しています。

かつてそうであつたようにリバイバルは最初から大きな炎となつて燃えるものではありません。昔、木炭で暖をとつていたころ、火鉢の炭火は完全に消してしまわないで灰の中に小さな火種を残しておき、必要な時はそこに新しい炭を足して燃やしました。それを「埋み火(うずみび)」と言いますが、サルデイスにも「埋み火」のような人たちがいました。主はいつの時代もそのような人を残し、用いてくださいます。私たちもそのような者として用いられたと思います。

祈り 主よ。私たちをリバイバルのための「埋み火」また「火種」としてください。

見よ。わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。(8)

初代教会には、内には間違つた教え、外には様々な圧迫がありました。教会内で信仰者を惑わす者に「ニコライ派」、「女偽預言者イゼベル」などがありました。ファイラデルフィアには「サタンの会衆」と名付けられているグループがありました。このグループについて詳しいことは分かりませんが、彼らは、見かけは神の「友」のようにふるまっていますが、実際は神の「敵」(サタン)であつたのでしょう。主は「彼らをあなたの足もとに來させてひれ伏させ」と言われました。教会は、主の力によつて間違つた教えに勝ち、分派を克服していくのです。

また、圧迫や迫害の中で伝道の門戸が開かれていくのも、主イエスの力によります。ファイラデル

フィアの教会は力ある教会ではありませんでした。だからこそ、彼らは主に頼りました。それで主は彼らのために伝道の門戸を開いてくださったのです。人々が教会に入つてきやすいようにと、教会の「入り口」を世的なもので飾り立てたり、人々を教会から逃さないようにと人間的なつながりを強くして教会の「裏口」を閉めようとしたりすることがあります。しかし、そうしたことは何の効果もないばかりか、主の教会を本来の姿から別のものへと変えてしまいかねません。門を開き、閉じるのは「ダビデの鍵」を持つ主です。この主の權威に頼り、従ふこと以外に伝道の門戸を開く方法はありません。

祈り 主よ。あなたが開かれるままに進み、あなたが閉じられるままに退くことを私たちに教えてください。

わたしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。(9)

ラオデイキア教会へのメッセージは、まさに、教会への健康診断書であり処方箋です。この教会への主の診断は、「生ぬるく」(16)「みじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸である」(17)というものです。そしてその処方箋は「火で精錬された金」、「白い衣」、「目薬」です。

「火で精錬された金」とは試練を通して培われた「練られた品性」(ローマ5・3~4)のことです。「白い衣」は「きよめ」を表し、「目薬」は私たちの霊の目をひらく「啓示の御霊」(エペソ1・17)のことでしょう。そして、これらのものは世の中にはなく、「キリストの薬局」にしかありません。

そうしたものを「買う」というのは、私たちが価値を置いてこの世のものを犠牲にしても、信仰的・霊的なものを求めるべきことを言っています。主が私たちにお与えくださるものは、すべて「恵み」によるのですが、その恵みは「棚からぼた餅」のようにして得られるような「安価な恵み」ではありません。払うべき犠牲を払って受けるほどの価値あるものなのです。

ラオデイキア教会は、しばしば、一番駄目な教会の姿を描いていると言われますが、そうでしょうか。主は「わたしは愛する者を叱る」と言っています。ラオデイキア教会を叱責に足る教会として愛しておられます。一番駄目な教会は主の叱責すら与えられない教会と言つてよいでしょう。祈り 主よ。叱責の中にあるあなたの愛を感謝します。

この獣には、大言壮語して冒瀆のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。(5)

「竜」は「サタン」、「獣」は「反キリスト」のことです。獣には十本の角があり、角はそれぞれ王冠をかぶっています。それは、獣が全世界の上に「王」として君臨することを表しています。

獣の権威は竜(サタン)から来ています。サタンは自らが神になろうとし、ことごとく神を真似ますが、ここでもそうです。キリストが御国の王として世界を支配しておられるように、サタンは反キリストに世界を治めさせようとします。しかし、その期間は、キリストの支配が永遠であるのに比べ、わずか「四十二か月」(三年半)に制限されています。「七年」なら完全な期間ですが、その半分の「三年半」ですから、これは、反キリ

ストの支配が不完全で短いことを言っています。

私たちが失望したり、思い煩ったりするのは、

私たちの受ける苦難が永遠に続くかのようには勘違いするからです。神と神に属するもの以外に永遠なものはありません。その他のものはすべて一時的なものです。黙示録は「ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である」(13・10)、「イエスに対する信仰を持ち続ける者たちの忍耐が必要である」(14・12)と言つて信仰者に「忍耐」を教えています。そして、その忍耐が可能なように、患難の期間が短くされているのです。それは私たちにとって大きな慰め、励まし、希望です。私たちはそれによつて苦難を乗り越えることができるからです。

祈り 主よ。来たるべき永遠の栄光を思つて、今の一時的な苦難を乗り越えさせてください。

また、子羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には子羊の名と、子羊の父の名が記されていた。(1)

13章では反キリストが「獣」として描かれていましたが、ここではキリストは「子羊」として描かれています。「獣」と「子羊」はいかにも対照的です。獣は人に恐怖を与えますが、子羊は安心を与えます。獣は奪いますが、子羊は与えます。獣は大きな力を持っていますが、それは滅び行くものです。子羊は一見して力のないもののように見えますが、じつは王の王、主の主です。そして獣は大水の上にはいますが、子羊はシオンの山に立っています。

「シオンの山に立つ」とは、ゼカリヤ14・4に「その日、主の足はエルサレムの東に面するオリブ山の上に立つ」とあるように、主イエスが

地を治めることを表しています。子羊は獣の支配を終わらせ、獣の国にかえてご自分の御国を打ち立てられるのです。

子羊と共にいる「十四万四千人」は7・1~8で言及されていた人々で、ここでは「神と子羊に献げられる初穂」(4)と呼ばれています。「初穂」という言葉は殉教者を示唆しますので、黙示録6・9~10で「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか」と叫んでいたたまいであると思われる。彼らの叫びは聞かれ、さばきの時となりました。主の正しいさばきが行われる時、彼らは子羊と共にいて、そのさばきの証人となったのです。

祈り 主よ。あなたの正しいさばきが必要に行われることを信じ、忍耐する私たちとしてください。

天よ、この都のことで喜べ。聖徒たちも使徒たちも預言者たちも喜べ。神があなたがたのために、この都をさばかれたのだから。(20)

黙示録17章には獣の上に座っている「大淫婦」(17・1)が登場します。それは地上の都市で「大バビロン」(17・5)と呼ばれています。反キリストである獣は、その活動の拠点に地上のひとつの都市を選びます。獣は先に「二人の証人」を殺しましたが、その都は「そこで彼らの主も十字架にかけられた」(11・8)とあるようにそれは「エルサレム」を指します。

しかし「大バビロン」は「エルサレム」よりも大きな都(17・18)で、あらゆる富がそこに集中しているところです(18・7、19)。そこには「預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出され」(18・24)まし

た。信仰者を迫害し、義人たちを殺害してやまなかつたのです。これは歴史の上ではローマを指します。世の終わりにはローマ帝国が復興するか、

ローマに匹敵するような世界帝国が生まれ、その都で多くの信仰者の血が流される時が来るでしょう。しかし、この都も永遠ではありません。やがて、聖なる神の都、新しいエルサレムが花嫁としてやって来ます(黙示録21・2)。「大淫婦」に代わって純真な「花嫁」の時代となるのです。イエス・キリストの宣教によって始まった神の国は、このとき完成を見るのです。この時を待ち望む私たちは、地上にあつて、「子羊の婚宴」に備えるのです。

祈り 主よ。終わりの時代に、私たちをきよめて、あなたの花嫁にふさわしい者としてくださ

「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい。」(9)

黙示録には七つの「幸い」が記されています。

最初は「この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを守る者たちは、幸いである」(1・3)です。次は「今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである」(14・13)で、三つ目は「目を覚まして衣を着ている者は幸いである」(16・15)です。四つ目が「子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ」(19・9)です。残りの三つは、「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である」(20・6)、「この書の預言のことばを守る者は幸いである」(22・7)、「自分の衣を洗う者たちは幸いである」(22・14)というところに見つけることができます。

主イエスは宣教のはじめに、心の貧しい者、悲しむ者、柔和な者、義に飢え渇く者、あわれみ深い者、心のきよい者、平和をつくる者、義のために迫害されている者の幸いを宣言されましたが(マタイ5・3~10)、これらの「幸い」は、黙示録の「幸い」とともに、神の都で成就します。神が人とともに住み、人は神の民となります。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取つてくださり(21・3~4)、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見ます(22・3~4)。「天の御国はその人たちのもの」「その人たちは慰められる」「地を受け継ぐ」「満ち足りる」「あわれみを受ける」「神を見る」「神の子どもと呼ばれる」という幸いがすべて成就するのです。祈り 主よ。あなたがくださる幸いを、今、このときにも味わい、喜ぶ私たちとしてください。

しかり、わたしはすぐに来る。(20)

主イエスの直接の言葉を赤文字で印刷した聖書があります。「レッド・レター・エディション」と呼ばれます。多くの人は、最後の「レッド・レター」、つまり、イエスの直接の言葉は「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(マタイ 28・18〜20) だと言いますが、実際は、黙示録 22・20 の「しかり、わたしはすぐに来る」です。聖書は、主イエスの来臨の約束で閉じられているのです。

「キリストは死なれ、キリストはよみがえられ、キリストは再び来られる。」これは聖餐式で告白する「信仰の奥義」の言葉です。主の来臨は、主の十字架と復活と共に私たちの信仰の根幹です。それで、聖餐式のたびにキリストの再臨を告白するのです。また、「主が来られるまで主の死を告げ知らせる」(第一コリント 11・26)とあるように、聖餐式は、主の死を覚えるだけでなく、来臨を待ち望むものでもあります。礼拝や聖餐式のたびごとに、「しかり、わたしはすぐに来る」との主の約束を堅く信じ、心からの期待をもって「アーメン。主イエスよ、来てください」と、力強く答えていきましよう。

祈り 主よ。日々の私たちの祈りが「マラナ・タ(われらの主よ、きたりませ)」(第一コリント 16・22)でありますように。

メモントモリ

時は来て

時は過ぎ去つて行く

刻一刻と正確に冷淡に

時を定めた神により

時に従う定めを負うすべての人の前で

人生の終りに向つて進んでいく

メモントモリ

人の一生は長いようでも束の間

ある人にはゆつくりと ある人には突然に

しかし確実に訪れる人生の終末

人生の成功者にも失敗者にも

強い者にも弱い者にも

富む者にも貧しい者にも

健やかな者にも病める者にも

メモントモリ

多くの人は苦しみと悲しみと

侘しさの中で終わりを迎える

だが 真の神 救い主イエスを信じる者は

人生を虚しく悲しく淋しく閉じることはない

天の御国への希望と感謝をもつて

その時を平安に迎えることができる

生かされている今を生き活きと励んで

意義ある良い終わりに向かつて

メモントモリ

(T・N)

(メモントモリ：「人は死すべき者であることを覚えよ」の意)

皆さんの多くは、新年1月から、新しい手引を使って日々のデボーションをしようと考えていることでしょう。それは良いことですが、もっと良いのは、12月からデボーションの一年を始めることです。

というのは、聖書に「ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい」（第二テモテ2・8新改訳第二版）とあるように、主イエスのご降誕からデボーションの一年を始めるのは意義深いことだからです。実際、教会の礼拝はキリストのご生涯をたどる形で成り立っています。降誕から始まり、公生涯、ご受難を覚えてレントの期間を過ごし、ご復活、イースターを祝います。そして、ご昇天とペンテコステを祝います。一般のカレンダーは1月から新しい年が始まりますが、教会の礼拝のカレンダー（教会暦）は12月から始まっています。

教会暦は個人のデボーションにも取り入れられ、人々は一年を神の救いの歴史を圧縮したものと考え、父なる神のみこころから発し、イエス・キリストによって成就し、聖霊によって私たちのものとなった偉大な救いの御業を毎年くりかえして黙想してきました。

『日々の聖句』も、「教会暦」という歴史を通して受け継がれてきた霊的な資産を大切にしています。ですから、『日々の聖句』を使つてのデボーションは12月から始めていただくのが最善なのです。時計が12時から始まるように、個人デボーションのサイクルを『日々の聖句』とともに12月から始めてみませんか。

12月から『日々の聖句』をウェブページでも公開し、コメントを書き込んでいただけるよう準備をしています。12月になりましたら penguinclub.net/mokusou/ を訪れ、コメントをお残しください。

2019～2020年 教会暦

- 12月1日 待降節 Advent (～12月24日)
主の降誕に備えます
- 12月25日 降誕日 Christmas
クリスマス・イヴは降誕日の始まりです
- 1月5日 公現日 Epiphany of the Lord
主のバプテスマの日としても祝われます
- 2月26日 灰の水曜日 Ash Wednesday
レントの始まりの日
- 2月26日 四旬節 Lent (～4月4日)
主の受難を覚え復活を待ち望みます
- 4月5日 棕櫚の聖日 Palm Sunday
主のエルサレム入城を記念します
- 4月5日 受難週 Holy Week (～11日)
主の最後の一週間を記念します
- 4月9日 洗足の木曜日 Maundy Thursday
主の晩餐が定められた日
- 4月10日 受難日 Good Friday
主が十字架にかかられた日
- 4月12日 復活祭 Easter
主の復活日。生きておられる主を覚えます
- 5月21日 昇天日 Ascension of the Lord
主の昇天日。天におられる主を覚えます
- 5月31日 聖霊降臨日 Pentecost
聖霊が降り、教会が生まれた日
- 6月7日 三位一体主日 Holy Trinity
聖霊の降臨により三位一体が明らかになりました
- 11月22日 王なるキリスト主日 Christ the King
教会暦の最後の日曜日。主の来臨を待ち望みます



Penguin Club

www.penguinclub.net